

外伝 前から3両目の乗客

ハタハタが多く出回るようになると、秋田は本格的に冬の到来を迎える。11月から12月にかけて旬を迎えるハタハタは、焼き魚にして食べるもよし、鍋にしてもよし。居酒屋『かま田』でも、多分に漏れず、大勢のお客さんが注文する。

17時、開店。入口横の電気看板にスイッチを入れ、灯を点ける。その頃には既に辺りは真っ暗になっている。そんな暗闇の奥から今日もサラリーマンが何人も訪ねてくる。そんな客たちの中に、今日は珍しい顔があった。

「こんばんはー」

「いらつしやい！ おっと、珍しい客もあつたもんだな。剣、大和、ちよつと来てみる」

台所の奥でタコに片栗粉をまぶしていた私は、背をそらすようにして冷蔵庫の陰から覗き込んだ。

「いらつしやいませー！ あれ、霧島さんじゃないですか」

「どうもどうも、すっかりご無沙汰してしまつて」

叶ちゃんがそそくさと駆け寄り、お役人の肩にうっすら積もつた雪をはたく。

「確氷さんもお久しぶりです、……ああ、今は剣さんでしたね」

「お元氣そうですね、霧島さん」

全体的に顔の皺が深くなつたような気がするけど、私だつて人の事は言えない。

「最後に会つてからどれくらいになる？」

「どうでしたっけ、割と最近な気がしますし、えらく昔な気がしますね」

「年取つたら時の流れが速くなるつてのは、この年になつて考えてみると本当だな。剣、お前さんが結婚したのは14年だつたな？」

私は唐揚げの下ごしらえが済んだタコを釜田さんに渡しながらかつた。

「じゃあ5年前になるんですね、早いなあ……」

「感傷に浸つてねえで手を動かせ、大和！」

「なつ、釜田さんが話を振つたんじゃないですか！」

霧島さんは漫才のような二人のやり取りを懐かしそうに眺めつつ、座敷に上がった。

「それで、今日はどうして秋田に？ また仕事ですか？」
私はお通しのいぶりがつこを霧島さんに出しながら聞いた。

「いや、仕事やないんですよ……剣さんの力を借りたくつて」

そう言いながら霧島さんは自分の頭を人差し指でコツコツと差した。礼士さんと飲むつて話は本人から前もつて聞いていたけど、どうやらただ再会を祝すだけではないみたいだ。

とりあえずの生ビールを一口か二口くらい飲んだ頃、ガラガラと凍つてついた鉄製の引き戸を開ける音がした。

「こんばんは」

「こんばんはー！」

「いらつしやい。待つてたぜ、旦那。お嬢ちゃんに坊主も一緒か」

頭や肩にうっすらと雪を乗せて、私の家族が入つてきた。

「おかえりなさい」

「ただいまー！」

結がとたと私の足元に駆け寄つてきた。

「おかえり。幼稚園、楽しかった？」
「うん！」

あれやこれやと今日の出来事を聞き出しながら、霧島さんの待つ座敷に子供椅子を用意して座らせる。後ろから重い足音がした。振り返ると、幼い息子を抱いた夫が立っている。

「おかえり。お迎えお疲れ様、お父さん」

「ああ、お母さんこそ」

礼士さんは腕に爆睡している連を抱えたまま霧島さんに会釈した。

「お久しぶりです、霧島さん」

「ご無沙汰です、剣さん。すっかり遅くなってしまいましたけど、お子さんがもう一人生まれたそうで。おめでとうございます」

「これはどうも、また賑やかになりそうです」

私たちは揃って微笑んだ。

「これでノンアルコールな生活から解放されますね」

「それがそうでもないんですよ。妻はまだ授乳してお酒は控えるので、僕ももう少ししばらく付き合いますよ」

「店としては酒を飲んでくれたほうがありがたいんですが、な」

釜田さんが熱した油にタコをぐぐらせながら茶化した。

「で、ご注文は？」

私は礼士さんにもお通しのいぶりがっこを出し、伝票にメニューを書き込む。

「飲み物はノンアルコールビール、貝焼きと刺身三点盛り、中国野菜の炒め物、梅チャールハン、ハタハタの焼き魚は二つ、おでんは大根とこんにゃくと、結は何を食べる？」

「えーとね、また、ごちゆるちゆる！」

「……卵としらたき、あとはんぺん」

「牛スジはいいの？」

「忘れてた、それもお願いしていい？」

「ええ。霧島さんは？」

「わたし、オレンジジュース！」

「はいはい、結、持ってきてあげるから人のおしやべりに割り込むんじゃないの？」

「ははは、子育てでも大変ですね。ええと、小芋の甘辛炒め、里芋の煮っ転がし、牛バラとアスパラのガーリックソテー、豚キムチ、お酒は何かありますか？」

『まんさくの花』が美味しいですよ。僕の地元の酒です」

「じゃあそれを冷で」

「かしこまりました」

注文を繰り返して、先に飲み物だけ叶ちゃんに運んでもらう。

「結ちゃん、こんばんは。おじさんの事覚えてる？」

「えー、おじさんだれ？」

礼士さんは連をそっと座布団に寝かせながら結の返事に苦笑した。

「結がまだ赤ちゃんだった頃に会ったことがあるよ」

「おぼえてない」

「結ちゃんも薄情やなあ、おじさん悲しい」

「失礼します、『まんさくの花』の冷酒とノンアルコール

ビール、結ちゃんはオレンジジュースね」

「あ、大和のおぼちゃん、こんばんは！」

「こんばんは、あと私はお姉ちゃんね。おぼちゃんってのはね、あそこにいるこわい女の人のことを言うの」

「叶ちゃん？」

彼女は後でしばいておくことにして、とりあえず私は貝焼きを作ろうと網を片手に生け簀に向かった。礼士さんのためにとびつきり大きなホタテ貝を選ぶ。

「年末年始を控えて、『こまち』も結構混んでましたね。増結とかすればいいのに」

乾杯をして、霧島さんは開口一番にぼやいた。

「あれは固定編成の電車ですし、気動車みたく簡単に増結できないのがしんどいですよね。臨時列車を選んだら空いていることが多いのでお勧めですよ。……それで、霧島さん。僕にお話ししたいことというのは？」

お通しのいぶりがっこをぼりぼりと噛み砕きながら、

礼士さんが本題に切り込んだ。

「あまり子供に聞かせられない話じゃないでしょうか？」

「正直言って、ちよつとまづいかもれませんね。あまりよろしくない内容なので」

焼き網の上で炙られるホタテ貝の横でバターを切りながら、私はそつと二人の会話に耳を傾けた。まだ客の入りが少ない時間帯で、聞き耳を立てるのは容易だった。

「剣さん、この少年をご存知ですか？」

霧島さんは礼士さんにスマホの画面を見せた。私は貝焼きを釜田さんに頼み、先におでんを取り分けることにした。

「車いすの天才ハッカー少年、伊那路翔太……その将来性を買われて国のホワイトハッカー機関からオファーを受けていたものの先日、鳥取県沖で水死体となって発見されたって書いてありますね」

知らない話ですね、と礼士さんは首を横に振ってスマホを返した。

「ええ、犯人は開聞雁一、伊那路君の叔父にあたる人間だそうです。未だに伊那路君殺害の容疑を否認していま

すが、警察も馬鹿ではありません。既に物証も複数確保して、起訴しています。裁判になったら開聞にはまず勝ち目は無いでしょう」

礼士さんは少し困惑したように霧島さんに垂れ目を向け、頭をぼりぼりと掻いた。まだ30代前半なのに、もう半分くらい白髪になっている。

「話が読めませんか。こう言うのも難ですが、終わった事件ではないですか？」

「話はこちらからですよ、剣さん。この開聞、それ生前の伊那路君が関与したとされる別の事件がありましたね。それについて剣さんの知恵を貸してほしいんですよ」

「失礼します、おでんです」

私はおでんを礼士さんの前に置き、結の前にはプラスチック製のお子様プレートを置いた。

「ねえおかあさん、これあけて」

「これって？ 落花生じゃないの。結、これは本物の落花生だけだね、食べるんじゃないよ」

「えー、ピーナッツたべたい！」

「だから食べ物じゃないんだってば」

母子の押し問答を見ながら霧島さんが自分の箸置きに手をかけた。殻が割れる乾いた音がして、中から茶色い実を取り出して結の方を向く。

「結ちゃん、あーん」

「ちよっと、霧島さん？」

私は少しふくれっ面をした後、諦めて厨房に戻ることにした。たかが落花生にむきになることもない。とりあえず冷蔵庫からハタハタを取り出し、魚焼きグリルに突っ込んだ。

「で、別の事件というのは？」

礼士さんはいつものように自分の落花生を割り、中身を口に運びながら続きを促す。変な所が結に遺伝してしまっただろうか。

「これです。先月3日の未明、京都市内の銀行に賊が侵入したんです。夜間の犯行で、警報装置や防犯カメラの機能は停止されていて、朝になって店の者が来て初めて被害が明るみになったそうです」

礼士さんははんぺんを半分に分けて片割れを結に食べさせつつ、またスマホに目を落とす。

「被害総額3億円ですか、派手にやりましたね」

釜田さんが二人の間に割り込むように料理を運んで行った。

「貝焼きと里芋の煮ところがし、お待ちどお。他の料理もしきにできるが、まあゆっくりしていってくれや」

「ありがとうございます。立派なホタテですね」

礼士さんは私の方を見て微笑んだ。私もワインクで応える。

「盗まれたものは一つだけ、貸金庫に預け入れられたものの中でも特に貴重だった十四代酒井田柿右衛門の手によって作られた有田焼の大皿です」

「十四代酒井田柿右衛門というのは、『ななつ星九州』の洗面器を遺作とした人間国宝の方ですよね？」

「急に眼の色を変えましたね、剣さん？」

霧島さんはどことなく悪人めいた笑みを浮かべ、よく煮込まれた里芋に箸をつけた。

「その大皿は銀行内でも特に奥の方にある金庫にしまわれていました。電子鍵で厳重にロックされていて、それを突破するのは普通の技術者やハッカーでは無理です」

「なるほど、少しずつ読めてきました。その厳重な金庫も伊那路君が破った、ということですか？」

役人は鉄道員の前で大きく頷いて、『まんさくの花』を呷る。赤い顔で頷くものだからどことなく赤べこのようだ。

「少し甘めですけど、すっきりして美味しいですね」

「ええ。僕もこの日本酒が大好きなんです。ここしばらくご無沙汰しています」

「失礼します、刺身三点盛りです。今日は中トロと金目鯛、寒ブリです」

叶ちゃんが刺し盛りを机に置く。金目鯛はついさっき市場で手に入れたものだ。朝取れでよく乗った脂がてらと輝いている。

「これは立派ですね。結、醤油取って。……いや、それはソースだよ。その隣。はい、ありがとうございます」

礼士さんは醤油を小皿に垂らし、そっと隣で眠る連を見た。親指をしゃぶりながらすやすやと眠っている。私はちりちりとして子供たちに目を配りつつ、手際よくターサイとチンゲンサイをごま油とにんにくで炒めていく。

「で、剣さん。その有田焼の大皿が入った金庫ですけれど、なかなかこれがクセモノですよ。電子鍵は既存のインターネットから完全に独立した回線を組んじよって、通常のハッキングでは存在すら明らかになりません」

「つてことは、その金庫とやらをこじ開けるには現地にパソコンをしょって、一対一でタイムマン張るしかねえってことだな？ 豚キムチと牛バラアスパラガーリックンテー、お待ちどお」

釜田さんもその事件に興味をひかれたのか、料理を作りつつもずつと話を聞いていたみたいだ。

「そういうことです。で、剣さんの出番はここから」

「待ちくたびましたよ」

礼士さんは先を促し、豚キムチに手を伸ばそうとした。

だが、突然、真横に座る結が火の付いたように泣き叫び始めた。

「結、どうした？ あーっ、お父さんのお刺身を横取りしたな？ 駄目だよ、これはワサビが辛いんだから」

「やれやれ、手のかかる娘だ。私は呆れ笑いを浮かべながら、結に水を持って行って飲ませてやる。」

「大丈夫？ もう辛くない？」

「まだベソをかきつつも、結はこっくりと頷いた。」

「よしよし、これに懲りたら勝手に他の人の食べ物を横取りしたらダメよ」

口元を拭いてやり、寝相で少し乱れた連の服を直して厨房に戻る。

「子育ても大変ですね」

「ええ、僕の娘が小さかった頃を見ゆうみたいです。今は娘も大きくなって、反抗期で手を焼いています」

礼士さんは霧島さんの言葉に泣き笑いのような苦笑を浮かべた。

「僕もいずれは結に嫌われる日が来るかもしれませんね」

「いざ来たらあつという間ですよ。子供の成長はタケノコみたいなもんです」

ひとしきり笑いあつてから、礼士さんは話を本筋に戻した。

「で、僕の出番というのは？」

霧島さんは日本酒を飲み干し、少し据わった目で礼士さんを見た。酔いが回ってきたのか、どんぐりのような目が少しうるんでいる。

「事件は概ね解決したがですけれど、一つだけ気になっていることがあります……」

現場の銀行を見せてもらい、私と沖君は帰りの路線バ

スで京都駅に向かっていた。

「概ね聞いていた通りですね」

沖君は私の隣席でつまらなそうに言った。

「そうね。全く、展覧会が近いからといって東京のオーナーが京都の銀行に預けるものだから、わざわざこっちまで出向かないといけないのは面倒ね」

「ですが、八雲警部。ここから本当に智頭まで行くんですか？」

「行けって言われているから行くしかないじゃないの、お役所仕事なんだから。全く、たかが焼き物のオーナーが有力な国会議員だからって上層部も付度しすぎなのよ」

運悪く遠出を命じられた私と沖君だが、焼き物が盗まれた現場に向いたり、関係者に話を聞くために鳥取の山奥までのこの訪ねたり、そんなものは現地の警察に任せておけばいいはずなのに。

苛立ちと徒労感を覚えながら京都駅のホームに向かう。特急『スーパーはくと9号』は既に私たちを待っていた。銀と青をベースに、所々赤色のアクセントカラーが入っている。

「3号車だから前から1, 2, 3両目……ここですね、乗りましょう」

編成のちょうど真ん中の車両だ。車内に入ると席は3割くらい埋まっていた。車端部には車いす用の座席があるが、スーツ姿で眠り込んだ中年が大きなキヤリーケースを置いて場所を占領していた。

京都から智頭までは2時間半、上郡という山陽本線の駅から智頭急行線に入る。中国山地を縦断して鳥取県の山間部にある智頭に至る路線で、列車はそこから鳥取や倉吉まで直通する。道中長旅。私は鳥取県警から送付さ

れた伊那路少年殺害事件の資料に目を通すことにした。

伊那路少年の遺体が鳥取県沖8キロの所で発見されたのは11月8日未明、通りかかった漁船が遺体を発見したという。死後丸一日は経過しており、体に縛られた痕跡があったことから殺人と断定して捜査したところ、すぐに開聞に行きついた。

開聞雁一の写真も捜査資料に掲載されていた。こけた頬をした貧相な男で、職業はプログラマーということになっているが、闇ブローカーとしての側面が大きそうだ。伊那路少年の親権を有しており、自動車事故により脚が不自由になった彼を連れて数年前に智頭に引越した。

いわくつきの人物で、数年前に伊那路少年が脚を怪我した件はこの男の仕業ではないかという説もある。当時の警察によって取り調べこそ受けたものの、証拠不十分につき無罪と判断された。今回の殺害や銀行襲撃については一貫して無罪を主張しているが、殺害については伊那路少年の縛り痕の形状に酷似した麻縄を所持していたことなどが決め手となった。

「嫌な事件ですね」

沖君が小さく漏らし、私は沈黙で同意した。これから会いに行く伊那路少年のリハビリ担当者話にも目を通しておこう。

智頭に着いたのは17時半前だった。山間のあまり大きくない駅で、澄んだ空気に吐息が白い。反対側のホームでは対向の『スーパーはくと』が発車を待っていた。

沖君は乗り物酔いを起こしたのか少し青い顔をしていたが、何も言わずに目的地に向かった。

自動車事故で片脚の神経を損傷した伊那路少年は、療養とリハビリを兼ねて数年前にこの山奥に越してきたの

*

*

だという。国のハッカー機関にスカウトされたくらいの逸材には、ここでの生活も電波さえあれば何の苦勞も無かったのかもしれない。

目的地の智頭神経外科病院は智頭駅からタクシーで10分とかからなかった。事務室に通されると、院長と伊那路君の担当看護師が待っていた。既に鳥取県警にも聞かれた内容を繰り返してくれた。彼はリハビリには熱心だったものの、回復は絶望的か、回復が望めたとしてもかなりの時間が必要だったという。

「彼は自動車事故についてはあまり多くを話したが、りませんでした。覚えていない、分からないと返すばかりでしたが、彼は聡明な子でした。そんな子が分からないと返すなんて、絶対あの開聞とかいう男に口止めされていたんですよ。あの男が翔太君を撥ねたとか、そんなオチやないんですか、どうせ？」

看護師の阿賀野さんは開聞に対する不信感を隠そうともしなかった。太ふりな胸をぶるぶると振り回すような身振り手振りを交えながら怒りをあらわにした。

「いつも胡散臭いと思っていたんですよ、あの男！病院にたまにリハビリの様子を見に来ても、態度は横柄やし、翔太君の心配はろくにせんし！翔太君もあの男を煙たがっていました」

沖君は手元のフリップをめくって資料を見せてくれた。写真には色白で線の細い少年の姿がある。伊那路君は幼くして両親が離婚、母方に引き取られるも母親が病死した後は叔父である開聞に親権が渡った。彼が自動車事故に遭ったのは開聞と暮らすようになった直後だ。警察の捜査にも関わらず真相は不明のままになっている。

「小学生の時に母親を亡くし、あの様子やと開聞もあまりろくな育て方をせんかったんでしよう、その反動か私

にはよくなついでくれましたよ。自慢やありませんけど。高校生ということもあって、子供のようなたべたしたなつき方ではないとはいえね」

阿賀野さんになついたのは、彼女の年齢もあるのかもしれない。伊那路少年の母親が生きていたら阿賀野さんとそう変わらない年齢だっただろう。

「彼はホワイトハッカーとして国にスカウトされるほどの優秀なパソコン技術を持っていました。やはり、パソコンとか機械が好きな子だったんですか？」

私の質問に阿賀野看護師は考え込んだ。

「うーん……さすがにパソコンの話をするときは楽しんでました。ですが、楽しいだけじゃない感じもありましたね。何というか……後ろめたさ、とでも言いそうな感じの」

鳥取県警に対する返答と内容的には同じだ。後ろめたさ、というのは銀行のシステムや金庫のハッキングに関与させられたことを指すのだろうか？

「他に好きなものは無かったですか？本とかテレビとかアイドルとか、お気に入りのユーチューバーとか」
沖君がさらに踏み込んだ質問をする。鳥取県警はこの質問をしなかったが、どう出るか。

「そうですね……本人は遠慮をしかあまり話すことはありませんでしたけど、電車が好きやつたみたいです」
想定していなかった返答に、私と沖君は思わず顔を見合わせた。鉄道で事件といえは、お互い何言わずともあの秋田県民が思い浮かんでしまう。

「そこを走っている『スパーはくと』ってあるでしょ？あれが結構お気に入りやつたみたいで、何回かメカニズムの話をしてくれました。HOT7000系5両が基本編成って、私ですらそらんじることができるよう

になりました。ただ、最近はその後も後ろめたい感じが混じるように聞こえたりして……」

さすがに考えすぎかもしれない、とこれ以上話すのを阿賀野さんは躊躇ったが、私と沖君は続きをせがんだ。

「翔太君が最後に病院に来た時、開聞と一緒に玉造温泉に行くって話をしてくれたんです。珍しいこともあるものだと詳しく話を聞いてみたら、今度の土日に泊まりで連れて行ってくれるって教えてくれたんです。車いす対応座席のある前から3両目の3号車の切符を取ってくれた、と嬉しそうに……でも、何か隠しているような面持ちで教えてくれました。もう断言します、あれはカラ元気ででした！」

その「今度の土日」に京都で有田焼の大皿が盗まれ、その事件に伊那路少年が関与している可能性が高いということはまだ話していない。伊那路少年が開聞に脅されるか何かで無理矢理に嘘を強要されたとすれば、カラ元気であったことにも説明はつく。

「何時の列車で向かったか聞きましたか？」
「ええと、智頭を17時半くらいに出るって言っていました。何なら智頭駅のロータリーまで伊那路君を送っていきましたし」

この病院はグループホームも併設していて、車いすの人を運ぶ車が何台かあるのだという。伊那路君は17時半頃に智頭から鳥取方面に行ったということは、さつき私たちが乗ってきた『スパーはくと9号』に乗ったこととなる。確かにあの列車には車いす対応座席が前から3両目の3号車にあった。

伊那路少年にはアリバイがある。裏を返せば、開聞にもアリバイがあるということだ。
そこから色々な情報を引き出そうと腐心したが、鳥取

県警の資料にある通りの情報しか出てこなかった。

「結局、智頭駅に送り届けた時が伊那路君と最後に会話を交わした機会でした。前から3両目の3号車、とカラ元気で……」

「まさか、この事件にも八雲警部や沖刑事が関わっているとは」

礼士さんは呆れたように言つて、ハタハタの焼き魚を解体する。骨を丁寧にあいて、自身を結の口にせつせと運んでいる。雛鳥に餌を与える親鳥といった趣だ。

「世間は狭いもんです」

霧島さんも苦笑を隠さず、残り3割くらいになった中国野菜の炒め物に箸を伸ばす。私はだして炊いたご飯をバターで炒め、天日干しちりめんじゃこことみじん切りにした梅、大葉、ネギを中華鍋に投入する。べの梅チャーハンだ。

「で、僕は開聞と伊那路君のアリバイを見破ればいいんですか？」

「普段ならそうなんでしょうけど、今回はちよつと毛色が違つがですよ。というのも、結局あの二人のアリバイそのものが立証できんかつたんです」

予想外の展開に、礼士さんは少し目を丸くした。私は思わず手を狂わせそうになった。

「そりやまた珍しいこともあるもんだな、明日は槍でも降るんじゃないか？ 小芋の甘草炒め、お待ちとおささん 釜田さんが料理を机に置きながら茶化した。私も礼士さんに時刻表トリックの解明を求めないという展開は久々だ。

「おとうさん、プチプチいらない」

「ははは、結にはふりこはまだ固かつたか。ほら、お野

菜も食べなさい、おいしいよ」

「えー」

ターサイを食う食わないの攻防を眺めながら、国交省の役人は事情を説明する。

「玉造温泉に行ったとしても、二人が泊まったのは従業員などの目がほぼ届かないコテージのような宿やつたそなたがですよ。チェックインとチェックアウトこそ行われていたとはいえ、その間の時間で京都まで鉄道や車で往復することは可能でした。アリバイと呼ぶにはいささか不十分ながですよ。伊那路君殺害についてはそもそも開聞はアリバイを有していませんでしたし」

礼士さんは困つたように眉根を寄せ、小芋を口に運んだ。私もこの先の展開が気になって、チャーハンにざつと金胡麻をふりかけて礼士さんの元に向かう。

「失礼します、梅チャーハンです。ご注文は以上でよろしいですか？」

「おかあさん、アイスたべたい！」

「あなたはまずその野菜を食べなさい。というか結、今日は幼稚園で何かおやつを食べなかつたの？」

「たべてないよ」

礼士さんにそつと目配せする。

先生は何か言つてた？

いや、僕は何も聞いてないよ。

「今日は特別よ。でも、ちゃんと歯磨きして早く寝ること。何味がいい？」

「まっちゃー！」

「分かつたわ、お父さんは？」

「僕も!? ……バナラにしておこうか」

「確水さ、いえ、剣の奥さん、僕もバナラで！」

調子のいい大人二人のぶんも皿に盛る。再度礼士さん

のもとに戻つてみると、霧島さんは打つて変わつて深刻そうな表情をしていた。

「ただ、アリバイが不完全っていうのが厄介ながですよ。アリバイが完璧にあるとすれば、それさえ崩せばこつちのものんです。完璧やつたはずのアリバイが全部嘘なら、なんであなたは嘘ついたんやつて話になります」

礼士さんの横で寝ていた連が目を覚まし、むずかり始めた。礼士さんは慌てて抱き上げて、優しく揺らし始める。

「どうした、連？ オムツは大丈夫そうだけど、お腹でも減つたのかな？」

「剣さん、聞いてます？」

霧島さんは少し苛立ちを見せ、やけ気味に梅チャーハンを頬張つた。

「え？ ええ、アジフライがどうしました？ 僕はもうお腹いっぱいですけど、この梅チャーハンが美味しかつたので」

当然だ。礼士さんに合わせた味付けにしてあるのだから。

「しばらく会わんうちに平和ボケしましたね、アジフライやなくてアリバイの話です」

「アリバイだかアジフライだか知りませんが、僕の最優先事項は事件よりも育児ですよ。おーよしよし、こちら、眼鏡を取ろうとするんじゃない」

調理を概ね終えた私は助け船を出すことにした。

「ほらお父さん、貸して。せつかく霧島さんが頼つてくれているんだし、ちゃんと聞いてあげたら？ 連、こつちおいで、ほら」

「仕事中に悪いね、母さん」

ぶくぶくとした体つきの息子を抱き上げてあやす。お

腹が減ったわけでも、おしめを変えてほしいわけでもなさそう。それはそうと、また重くなつた気がする。釜田さんと叶ちゃんは微笑ましい光景として楽しんでいるようだ。

「話を戻しますよ、剣さん。要するに、あの二人が玉造温泉にいたと主張しながらもそれを完全に証明しきれない以上、彼らが京都で犯行に及んだと我々が主張しても物証を突き付けないとどうしようもないんです。相手のアリバイが中途半端なせいで、こっちも打つ手が限られているがですよ。この際物証やなくてもいい、何か矛盾を突きつきたい。そんな微妙な状況なですよ。剣さん、何か思いつきませんか？ 開聞を陥落させるのに、もうひと押しを突きつけないんです」

霧島さんは強引に話を進め、残りの梅チャージャーハンを全部口に放り込む。口元で大葉の切れ端が残った。

「なるほど。京都でも確たる目撃情報が無い、ハッキングの逆探知もできないから開聞と伊那路君の仕業だと証明できない、かといってアリバイを崩して論破もできない、と。状況証拠から考えて二人がクロなのは間違いないとしても、確かに八方塞がりですよ。そういうえば、有田焼の大皿はどうなつたんですか？」

「見つかっていません。ネットの闇オークションで処分されたと警察は考えようみたいです。もつとも、それも履歴とか追うのがとてもではないにせよ不可能らしく……事情はともあれ、伊那路君、やってくれましたね。現在金の動きから証拠を見つけようとしゆうらしいです」

「要するに、ネットを証拠として取り扱うのは不可能ということですね。あーほらほら、結、こぼすよ！」

口周りを抹茶アイスでべたべたにした結と格闘しながらも、礼士さんは考えを深めていく。

「伊那路君を殺害した容疑で開聞を逮捕したんですよ？ だったら、そこから余罪取り調べで吐かせるのが一番早そうですね」

叶ちゃんがおつかないことを言う。でも、搦め手ではあるもののそれが手っ取り早そうな気もする。

「……うーん、申し訳ないですが、今回は僕の出番は無さそうですね。あまり力になれそうな話でもないです」「そうですね……いや、えいですよ、剣さん。八雲警部と沖刑事が無茶を言うてきただけです。それに、開聞はもう警察の手中にあります。今でこそ虚勢を張っていますけど、陥落するのも時間の問題でしょう」

霧島さんは取り繕ったように言うが、その背後には僅かな失望が見え隠れしている。頭が切れるとはいへ、礼士さんは一般人のだから仕方ないじゃない。

「まあ、何か思いついたら連絡しますので。次は事件とか抜きで飲みましょうよ」

「そうだそうだ、せっかくの料理を毎度毎度血生臭い話の肴にされたらたまつたもんじゃねえからな」

礼士さんと釜田さんが霧島さんを揃つてとりなし、そのままお勘定に運び込む。

「じゃあ母さん、また後で。結と連を先にお風呂に入れて寝かしつけておくよ」

「ありがとう、よろしくね。結、連、お母さんはまだお仕事があるからお父さんと先に帰ってて。いい子で早く寝ること、いいわね？ おやすみ」

「おかあさん、おやすみー！」

「ごちそうさまでした、良いお年を！」

「まいどあり！ 来年もよろしく頼むぜ」

「ありがとうございました！」

賑やかな集団が去って、店内は萎んだように静かにな

った。

*

*

釜田さんが気を利かして早めに上がらせてくれた。とはいへ、夜が稼ぎ時の居酒屋での仕事だ。帰宅する頃には日付を跨、こうしていた。

「おかえり、瑞穂さん」

「礼士さん、ただいま。先に寝てて良かったのに」

「明日は夜勤でまだ時間があるから平気だよ」

礼士さんがお茶を入れてくれる間、手早くシャワーを済ませる。四大家族になつて、さすがに今のアパートでは手狭になりつつある。そろそろ引っ越しを検討したいところだけど、色々忙しくて物件探しにまで手が付けられていない。

「……」

ものに溢れた洗面所の鏡に私の裸身を映す。老化や二度の出産を経て、さすがに体の各部にたるみや劣化が見受けられる。でも、愛する人との勳章だと思えば悪くない。……過去の傷跡も、前よりは薄くなった。

シャワーを済ませると、居間で礼士さんが待つていてくれた。テレビでは武漢での新型肺炎のニュースをやっている。

「ちょうどできた所だよ、今持つていくからね」

子供ができてからというもの、育児に奮戦する毎日だ。こうやって夫婦でゆっくりする時間もすっかり貴重なものになった。結婚した最初の一年は二人きりで過ごすことができたけど。

「でも、今の方がいいな……」

「ん？」

ぼろりとこぼした咳きに、礼士さんは緩慢に反応する。でも、深く気にすることはせずに私に湯呑を差し出

してくれる。

「ありがとう。あら、ホットミルクにしたの？」

「うん。いつも熱い番茶では芸がないと思ってるね」

私は頼杖について礼士さんの顔を眺める。今や頭髮は半分近く白くなり、左頬の傷跡はだいぶ薄れた。優しいな垂れ目と、明るく燃える石炭のような瞳は変わっていない。

「お互いに老けたねえ」

私の視線に気づいたのか、礼士さんはほつりと言った。

「まだまだこれからでしょ。あと半世紀もすればどうなってるか分からないわよ」

「お互い、半世紀より先をしつかり見届けていこう」

私は小さく微笑んで、ホットミルクに口をつける。

「それにしても、霧島さんにも困ったもんだよ。子供の前で話していい話じゃないだろうに」

礼士さんにしては珍しく、不満げな表情を見せた。

「まあ、ちよっと引つかかるわよね」

「向こうも子連れで来るとは思っていなかったのかもね。事件の話だけなら百歩譲るとして、それに解を見出す姿勢は子供にはまだ見せられないよ。世の中、何でも解答があるとは限らないし、その解答を背負う準備も必要性も知らない」

私は少し目を伏せた。置いてきぼりにできない過去を呼び起こす。

「そういえば、さつき霧島さんに連絡したんだよ。さっきの話、僕なりに考えてみて一か所だけ気になる部分があったね。調べてみたらビンゴだった」

「えっ？」

「こうなってもおかしくない、とは思っていた。とはい

え、いざ目の当たりにすると驚いてしまう。

「聞かせてもらえる？ 夜は長いし」

「もちろん」

この人はまた、真相を見抜こうとしている。その刃は一度、私をも貫いた。でも、そのおかげで今の私がいる。

「さて……」

*

*

「さて、瑞穂さん。まずは手始めに、霧島さんから伝えられた情報のみから『スーパーはくと』がどういう列車か教えてくれる？」

いきなり質問を振られ、思わず目を白黒させてしまった。

「ええと、京都と鳥取を結んで、途中で智頭、だっけ？そこを通る特急列車よね？」

「そう。他には？」

礼士さんは楽しそうに質問するけど、私は焦りにも似た感覚に支配されていた。

「他に？ ええとね、3号車だっけ？ 車いす対応の席がある」

「いいところに気が付いたね。まだあるよ」

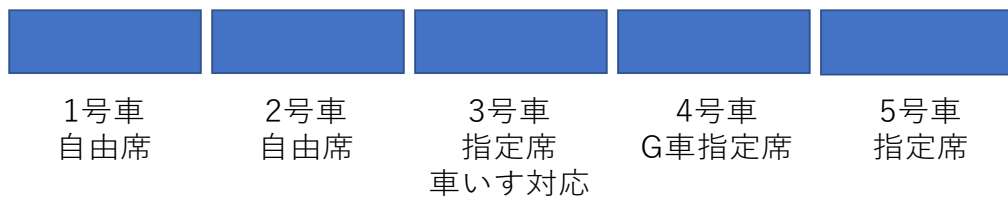
「まだあるの？ 何か、形式がどうか両数がどうか言ってたけどそこまで覚えていないし……降参」

両手を挙げてお手上げのポーズをする。礼士さんはひとときり笑ってから解説を始めた。

→ 図① 特急『スーパーはくと』基本編成図・時刻表

←鳥取・倉吉方面

大阪・京都方面→



列車名	スーパーはくと9号	スーパーはくと12号
智頭駅到着時刻	17:23	17:22
智頭駅発車時刻	17:24	17:24
行先	鳥取	京都

「まず、『スーパーはくと』が何両編成かが分かるよ。結論から言ってしまうと5両編成が基本なんだけどね。八雲警部が『3号車が真ん中の車両』って言って、なおかつ伊那路君が『前から3両目の3号車』って言っていた。これを組み合わせると、先頭から数えても最後尾から数えても3両目が3号車、つまり全体は5両編成となる。ちなみに、1号車が下り倉吉方面、5号車が上り京都方面だ(図①参照)。ここまでいい?」

礼士さんはインターネットから『スーパーはくと』の写真を見せつつ解説してくれる。ここまでは大丈夫だけど、これが何にどうつながるのか分からない。

次に、伊那路君自身についてだ。彼は足の障害で車いすを使用している。ということは、『スーパーはくと』の3号車にしか乗れない、ということだ。これは今補足する情報だけど、『スーパーはくと』で車いすに対応しているのは基本的に3号車だけだよ」

とりあえず『スーパーはくと』という列車について大体のことは分かった。ただ、礼士さんがここから何をどう見抜いたのか全く見えてこない。

「後は、八雲警部らが智頭駅に着いた時、反対側の線路にも対向の『スーパーはくと』が停車している、という情報もあるね。これは時刻表で調べたら分かるけど、『スーパーはくと12号』という列車だ(図①参照)。京都まで走る上り列車だよ。霧島さんとの会話で判明したのはこれくらいかな」

夫はそう言い、ホットミルクで喉を湿らせた。
「さて、瑞穂さん。この会話の中で一つ引つかかる点はない?」

私は目をぱちくりさせて、それから頭を巡らす。引つかかる点? 何だろう?

「……ヒントちょうだい」

「半分答えみたいなのだけど、伊那路君の言葉かな」
伊那路君の言葉? この話題の流れからして『スーパーはくと』絡みで伊那路君が何か言ったんだらうけど、

何が変かと聞かれると見当もつかない。
「何かしら、前から3両目とか言ってたけど、前から3両目って普通に考えれば3号車よね?」

礼士さんは小さく笑った。

「引つかかったね、瑞穂さん」
「えっ?」

動揺を飲み込むように、私はホットミルクに手を付ける。蜂蜜の甘さでも心の揺らぎは抑え込めなかった。

普通の人は知らなくて当然のことだから引つかかっても仕方ないと思うよ、とフォローを入れた上で礼士さんは解説を始めた。

「瑞穂さんの着眼点は鋭いんだよ。前から3両目、と伊那路君は言っていた。でも、この発言には一つおかしなところがある。瑞穂さん、『スーパーはくと』の基本編成は何両だったっけ?」

「え? 5両って言ってたでしょ?」

「そう、5両なんだよ。で、車いす対応の3号車は真ん中の3両目だ」

さっき言っていた通りだ。話が見えてこない。
「どこにもおかしなところなんて無いじゃない」

「そう、伊那路君は何も間違ったことを言っていない。ただ一つ引つかかるとすれば、彼の言い方にある。5両編成の真ん中にある3両目は、前から数えても後ろから数えても3両目だ。ならばどうして、わざわざ『前から3両目の3号車』なんて言い方をしたんだらうね?」

しばらくの間、礼士さんが何を言っているのか理解できなかった。

「伊那路君がなぜ『前から3両目の3号車』と言ったのか。そこにヒントがあるんだ。別に『3号車』とか『真ん中の車両』みたいな言い方でも良かったんだよ。何なら『後ろから3両目の3号車』でも同じ意味になる。そもそも、乗る号車までわざわざ教える必要なんてない。阿賀野さんは乗らないし、ホームで見送るわけでもなかったんだから。なのに伊那路君はあえて『前から3両目の3号車』という言葉で阿賀野さんに伝えた。なぜだらうね?」

分からない、で簡単に済ませたくなかった私は首を捻った。わざわざ編成中の車両の位置を教えてください、というのが問題なのだとしたら……。

「もしかして、前から3両目に来ない3号車があるってこと?」

礼士さんは小さく拍手を送った。

「そう、『スーパーはくと』の基本編成は5両って話したけど、あくまでこれは基本編成。基本じゃない編成もあるんだよ。それこそ、京都の銀行が襲われた先月3日は、『スーパーはくと』が基本じゃない編成で走る理由があった」

「先月3日? 11月3日は文化の日で祝日よね……連休?」

「そう、三連休だった。2日が土曜日、3日が日曜で文化の日。4日が振替休日。こんな時、公共交通機関はどのうなると思う?」

「混むわね。あと礼士さんが家を空けがちになる」

「『いまち』は臨時列車を走らせることが多いからね、運

転士も大勢必要になるんだよ」

礼士さんは苦笑いして、ぬるくなったホットミルクを飲み干した。

「そう、混雑するんだよ。それは『スーパーはくと』でも例外ではない。でも、この列車は臨時列車を走らせるんじやなくて、車両を増やして対応するんだ。つまり、いつもの5両編成より長い『スーパーはくと』が走るということになる」

なるほど、ようやく話が読めてきた。

「じゃあ、普段は存在しない6号車や7号車が連結されるってことね……あれ？ でも、おかしくない？」

礼士さんの垂れ目が先を促すように私の目を見た。

「伊那路君は『前から3両目の3号車』に乗ったのよね？で、1号車は倉吉の方にあるから、6号車や7号車を連結したところで、伊那路君が『前から3両目の3号車』に乗ったとしたらその列車は倉吉や、玉造温泉の方に行くんじゃないの？」

私の疑問に礼士さんは少し沈黙し、やがて笑い始めた。

「何がおかしいのよ」

「いやあ、ごめんごめん。もの見事に引っかかったなあって思ってた」

「どういう意味よ、説明して。ねえってば！」

私のふくれた顔をよそに礼士さんはひとしきり笑い、そろそろ種明かしをしようか、と言った。

「端的に言うよ、瑞穂さん。多客期の『スーパーはくと』には2号車が2両ある」

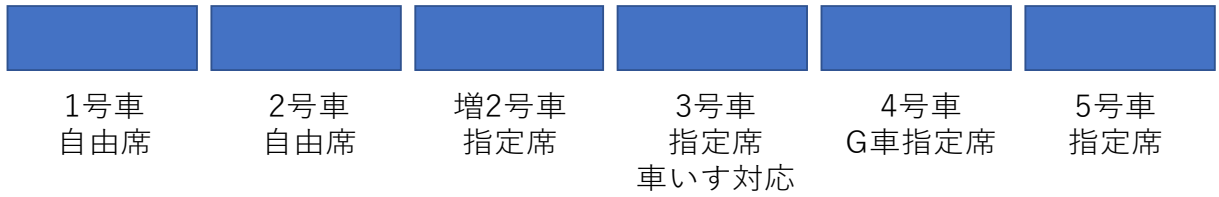
一瞬、礼士さんが壊れたかと思った。

「……はあ？」

特急『スーパーはくと』増結編成図

←鳥取・倉吉方面

大阪・京都方面→



『スーパーはくと』は日本でもあまり例のない列車でね、車両を増結すると1号車、2号車、増^ま2号車、3号車、4号車、5号車の6両編成になるんだよ(図②参照)。駅や車内の自動放送にもなっているくらいだから、現地に駆けば割とちよくちよく見られるんだけどね。指定席販売システムの都合でこんな感じになっているらしいんだ。事件前日の2日は『スーパーはくと9号』『12号』、そのいづれも増2号車を連結していたよ、霧島さんが調べてくれた」

増2号車なんて初めて聞いた。どことなくラーメン二郎を彷彿とさせる呼び名だけど、礼士さんが言うにはJR横須賀線では増1号車から増4号車までが日常的に見られるらしい。

「さて、瑞穂さん。増2号車が連結された場合、『前から3両目の3号車』という言葉が示す『前』というのは1号車？ それとも5号車？」

「5号車ね」

「そうだ。じゃあ、5号車を先頭にする『スーパーはくと』はどこに行く？」

5号車が先頭って上り列車よね？ ということは……。

「京都に行くの？」

礼士さんはまた小さく拍手した。

「ご名答、瑞穂さん。伊那路君が言った『前から3両目の3号車』という言葉から、彼と開聞が乗ったのは鳥取に行く『スーパーはくと9号』ではなく、京都に行く『スーパーはくと12号』だと分かる。つまり、伊那路君らは玉造温泉に行かなかった、彼らのアライバイは偽装ということになるんだよ。ついでに言うと、阿賀野さんは智

頭駅のロータリーまで伊那路君を送っていったそうだから、そこから二人が上下どちらの列車に乗ったかまでは確認していない。二つの列車は智頭駅を同時に発車するから、ホームまで見送りをされない限りはどちらに乗るかを簡単に誤魔化すことができる」

「でも礼士さん、増結された車両に車いす対応の座席は無かったの？ 増2号車にもそういう座席があったら、伊那路君が間違えて増2号車のことを3号車と呼んでいて、本当に鳥取方面に行ったのかもしれないでしょ？」

「そこも抜かりないよ。確かに、増2号車に車いすスペースのある車両を連結するケースもあるらしいけど、1月2日の『スーパーはくと9号』『12号』それぞれの増2号車には車いす対応座席は無かったそうだよ。これも霧島さんが智頭急行に確認してくれた」

私は何と云えばいいか言葉に迷い、とりあえずホットミルクを飲み干した。

「伊那路君がわざわざ『前から3両目の3号車』って言葉を選んだのには、どうにかして阿賀野さんに気付いてほしかったのかもしれないね。玉造温泉に行くというのは嘘だと、本当は京都に連れていかれて、何か良くない目に遭うと」

礼士さんはスマホに目を落としながら補足する。でも私には納得できなかった。

「それなら、阿賀野さんに直接助けを求めればよかったんじゃないの？ 聞かなくて、ずっと伊那路君につききりだったわけじゃないし」

「それは僕も同感だよ。ただ、それに反論するとすればいくつかの理由が考えられる。まず、伊那路君がコンピュータ技術を使って犯罪に関与させられたとして、彼がそれを犯罪と認識できていなかった場合、それか、彼自

身が脅迫されて口止めされていたり、彼自身の手によって証拠を隠滅させられていた場合。京都での銀行襲撃事件はこのケースに当たるね、インターネットを経由する際、足がつかなくて警察も苦労しているらしいし」

礼士さんは湯呑を二つ手に取り、台所に向かう。

「仮に開聞が伊那路君の脚に後遺症を負わせたとしたら、それを証明できなかった警察に対する不信もあったのかもしれないわね」

「その可能性も無くはないね。伊那路君が殺害された今となつては真相は定かではないけど」

台所からシンクを叩く水道の音が響いてくる。

「さっき霧島さんから連絡があったよ。鳥取の海岸に伊那路君が使っていた車いすが打ち上げられていたつて。警察が回収して解析したところ、盗聴器がくっついていたらしい。日頃から開聞によって監視され、身動きが取れなかったのかもしれないね」

礼士さんはそれだけ言つて、湯呑を洗う。居間には私と重苦しい空気だけが残された。

「とにかく、車いすに盗聴器がついていたという新たな物証も出てきたから、僕が今話した些細な矛盾が無くても、警察は開聞を陥落させると思うよ」

結果論になってしまうが、車いすが発見されたのなら初めから礼士さんを嘔ませる必要なんて無かったのではないだろうか。

「子供たちには聞かせられないわね、こんな話」

「そうだね」

台所から声が返ってくる。

「謎解きをして分かるのは、犯人が持っていた悪意の在り処。仮に悪意が無かつたとしても、誰かが誰かに傷付けられたという、知りたくもない現実。子供どころか、

私たちだつてそれに触れたら無傷では済まない」

私の小さな溜息を礼士さんは聞き逃さない。

「瑞穂さん」

「ん？」

湯呑を洗い終えて、タオルで手を拭きながら夫が戻ってくる。

「瑞穂さんは絶対に手放さないとと思うから、荷物を下ろしたら、とは言わないよ。でも、僕はずっと隣にいるから。辛いときは、一緒に支えるくらいはできる」

そう言つて、私の手を取る。この人の手はいつだつて大きくて、暖かい。

「ええ」

寝室から連の泣き声が聞こえてきた。

「最近は大人大人しかったのに、また夜泣きが始まったね」

「行ってくるわ」

事件は終わり、また私たちは日常に引き戻される。願わくば、この日常の中で生きていけたら。

連に少し母乳を飲ませてみると、礼士さんが寝室にそつと入ってきた。私の肩越しに息子の顔を覗き込む。

「どうした、連？ お母さんがいなくてさびしかったかい？」

結は川の字に敷いた布団の真ん中で、なぜか逆さまになつて眠っている。礼士さんはそつと元の位置に直してあげて、布団をかけてやる。

連も気が済んだのか、胸乳から口を離して眠りに落ちた。背中をさすってげつぷを出させ、ベビーベッドに寝かせる。

「お疲れ様、瑞穂さん」

「いえいえ。礼士さんも飲みたい？」

「結が起きるとまずいから遠慮しておくよ。また今度、

結が幼稚園に行っている時にでもね」

静かに笑いあつて、礼士さんは布団に入った。

「おやすみ、瑞穂さん」

「おやすみなさい、礼士さん」

私も布団に入り、眼鏡を外して目を閉じる。お互いの寝息の中、お互いの心臓の音を響かせながら、今日も眠りに落ちていく。

あとがき

この作品は2月14日に初稿を書き上げたが、特急スパーはくと』の増2号車の存在を知ったのは3日ほど前、トリックを組んだのは2日くらい前になる。文章・トリック双方かなりの急造仕様であり、各部にお見苦しい点も多いだろう。どうかご容赦願いたい。私としてももつと本腰を入れてトリックを練り、もつと完成度の高い作品に仕上げたかったのだが、2月15日というぐに間に合わせる方を優先した。

『旅する女』シリーズは2021年夏号で本編が完結し、秋号に制作秘話を掲載した。それ以来、気が向いたら外伝というかたちで劔たちに会おうと考えていたのだが、作者としてもまさかこんなに早く再開できるとは思っていなかった。書き始めこそは腕がすつかりなまっていたのだが、書いているうちに段々と勘を取り戻す感覚が快かった。

元々この作品は連載本編を最後まで見届けて天に召される四年生への餞として、居酒屋『かま田』を舞台にしたグルメを主体にしつつ、劔らの「その後」を描くつもりでいた。しかしながら、結局いつも通りの鉄道系推理小説になってしまった。一度終わらせた物語の続きを描くというのはなかなか骨が折れたが、多少なりとも暇つぶしになったのであれば幸いだ。

劔たちは気まぐれであるため、次はいつ顔を出すか分からない。またひよいと顔を出したら、どうか飽きたなどと言わずに相手をしてやっていただきたい。